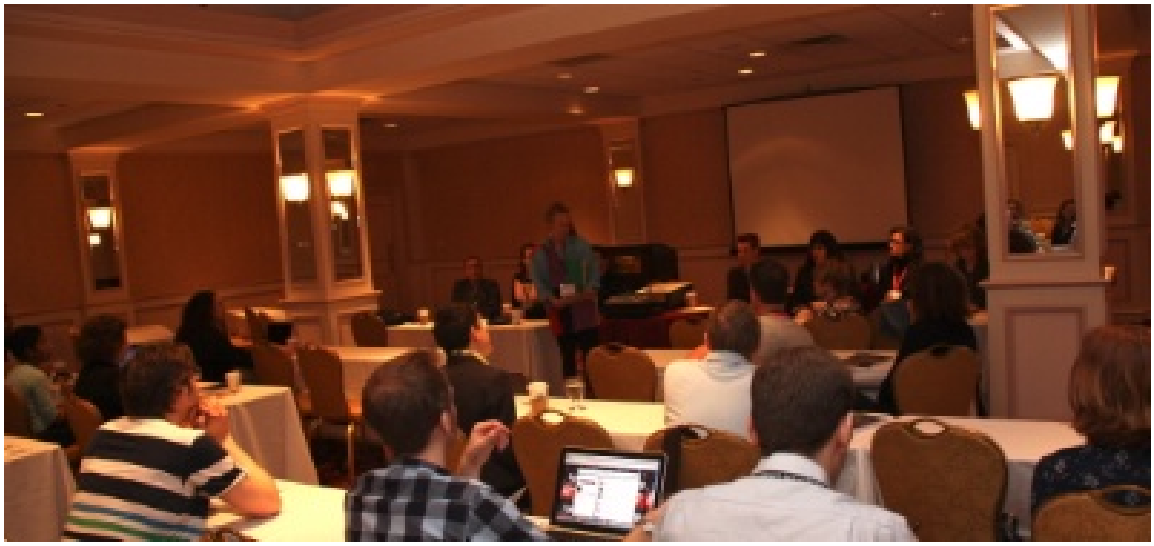
学会発表渡航支援報告書

菅野優香（かんのゆうか）
京都大学人文科学研究所研究員
発表題名： The Papan Girls and the Postwar Female Continuum: *Girls of Dark* (1961)
著者名：菅野優香
会議名：Society for Cinema and Media Studies (SCMS) Annual Conference
開催地：Boston, USA
参加期間：3 月 21 日～3 月 25 日

Society for Cinema and Media Studies Annual Conference は、映画研究、視覚研究、およびメディア研究に携わる研究者が集い、1 年に一度開催される国際学会であり、この分野の学会としてはおそらく世界でも最大規模のものである。世界中から研究者が集まるこの学会は、報告から成るセッションの他にも、数多くのワークショップやスクリーニングが同時開催されており、普段はなかなか接する機会のない非欧米諸国の研究者などとネットワークを拡げる絶好のチャンスでもある。また、延べ 5 日間にわたる会期とパネルの豊富さから、自分の興味関心の枠を出て、幅広く最近の研究動向について学べるという利点もある。

米国マサチューセッツ州ボストンのボストン・パークプラザ・ホテルを会場に 3 月 21 日から 25 日まで行われた今年度の学会において、報告者は、The Papan Girls and the Postwar Female Continuum: *Girls of Dark* （1961）というタイトルで報告を行った。取り上げたのは、田中絹代監督による 1961 年の映画作品『女ばかりの夜』である。戦後日本のセクシュアリティを語る上で重要な存在である「パンパン」とよばれた女性の更正と自立をテーマとするこの作品は、同時に、赤線や遊郭で働いていた女性たちからなる「女性の共同体（あるいは「連続体」）」についての映画でもある。売春防止法完全施行という歴史的背景や、日本の一般商業映画において前例を見ないレズビアン表象などにも注目し、「女性共同体」の重要性によって『女ばかりの夜』を「女性映画」として再考する報告を行った。

「女性映画」は、英語圏の映画理論において 1970 年から現在に至るまで盛んに議論されてきた極めて重要な概念である。そこでは大きくわけて “woman’s film” “women’s film” “women’s cinema”という三つの概念的区分があるが、日本語ではそ

れらを十把一絡げに「女性映画」とよんできた。日本の映画研究においては、「女性映画」と呼ばれているものが、実際にはフェミニスト映画理論でいうところの“woman’s film”にしか対応していないこと、また、時代的には 1920 年代、30 年代にのみ集中し、近代化、ナショナリズム、消費文化との関係でしかこのジャンルが考察されてこなかったと主張した本報告に対し、さまざまな意見が寄せられた。英語圏の研究者の一人は日本の「女性映画」が極めて独特の概念であり、英語の区分のどれにも対応していない可能性を指摘、”josei-eiga”という以外に方法がないのではないかという興味深い提案を行った。また、1940 年代後半に製作された一連の「パンパン映画」との違いについても強調したため、溝口健二ら日本映画の巨匠たちの描いてきた「パンパン女性」たちに対する田中作品の批評性といった議論にまで発展し、大変有意義なディスカッションができ、学ぶところが大きいパネルであった。

余談だが、今年の SMCS で特徴的だったことのひとつとして、映画祭関連の報告の増加を挙げておきたい。映画祭に特化したパネルが 7 つ、ワークショップが 1 つ、報告が訳 30 にものぼり、質、量ともにその飛躍ぶりが目についた。日本における LGBTQ 映画祭について調べたいと考えている報告者にとっては、この点についても多いに刺激を受けたことを付記しておきたい。